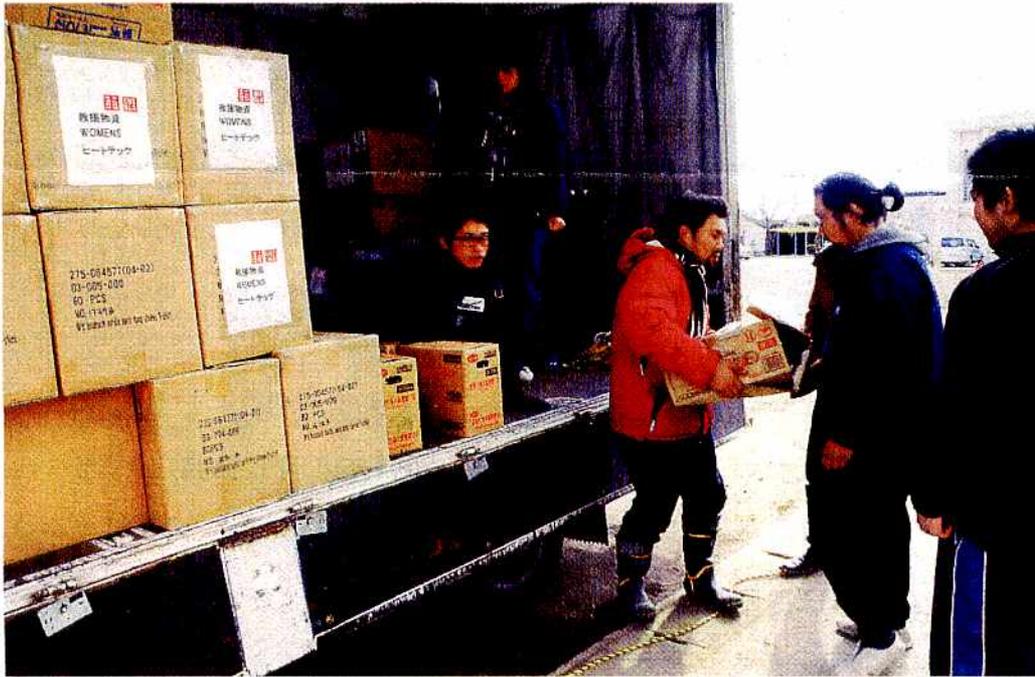


孤立地域で奮闘 国際ボランティアセンター山形

東日本大震災で被災し、孤立している地域を支援するため、山形市の認定NPO法人国際ボランティアセンター山形（IVYアイビー）は、震災直後から毎日、生活物資を運び続けている。「行政の手が届かない、隙間」への支援が自分たちの役割。被災者の声を丹念に拾い、奮闘する彼らの一日に密着した。

（報道部・高橋澄恵）

「隙間」の支援 われらの使命



被災地に生活物資を届けるアイビーのメンバー＝宮城県東松島市

「今日は東松島市の3カ所に荷物を下ろし、南三陸町を本格的に回る。忍れから石巻、牡鹿半島にも行く」。午前8時半、山形市のアイビー事務所前、宮城県の現地向かう数人が行き先を確認し合

必要な物 直接聞き毎日搬入

認定NPO法人国際ボランティアセンター山形 通称IVY（アイビー）。1991年設立。カンボジアなどへの支援や在日外国人支援、ボランティア参加希望者からの相談対応などを行う。スタッフは外務省委嘱のNGO相談員も務める。海外や阪神大震災でのボランティア実績を生かそうと、事務局内に14日、「東北広域震災NGOセンター」を開設。同センターには国内外のボランティア団体が参加し、アイビーは調整役も担っている。

部屋の中には多くのお年寄りが身を寄せていた。高橋さんが「お母さん、何か欲しいものない？」と尋ねると、ぎりぎりの生活をしているはずのお年寄りが「おにぎりが届ければ、水は井戸がある。間に合っている、というより間に合わせているよ」と笑う。「欲しいもの全部は無理だけど、言うだけ言ってみて。スポンや靴下は？」と促すと、「そうだな、靴下もスポンも欲しかった。和風のおかずが食べたい」。遠慮がちに話し出した。

最初に到着した東松島市。家々が流され、水浸しの大地が広がる。報じられる機会が少ないことが関係しているのか、震災から約1週間は、ここだけぽっかり穴が開いたように支援が届かなかったという。上着や長靴を運んだメンバーの一人、山形大4年の高橋愛実さん（24）は顔なじみになった避難所の住民の話に耳を傾けた。希望された品目は事務局に携帯電話で伝え、山形市に残ったスタッフが調達に奔走して翌日に備えている。

車はさらに北上、南三陸町の対策本部があるベイサイドアリーナに肌着類を届けた。町職員で物資調達班の長を務める千葉啓さん（44）は「欲しいものは日々変わる。直接聞きに来て、タイムリーに搬入してくれるのがありがたい」。

住民と直接話すことで知ることはたくさんある。初めて訪れた避難所で、管理者が「避難所と呼んでも地元を離れず、200人ぐらいで集まっている集会所がある」と教えまわった。案内を頼み、早速その場所に向かう。路肩が崩れ落ち、分断された道なき道を進んでたどり着いたのは、太平洋を間近に臨む馬場・中山地区。一面がれきの傾斜地を今日も繰り返し広げている。

この日バンに積んでいた靴下や菓子類を渡し、また明日来ることを約束する。お年寄りたちは「悪いなあ、ありがどう」「山形から来たの、せつなかだから、ご飯食べていけ」。明るい表情で何度もお礼を言った。

南三陸町を離れたのは午後7時。石巻市の避難所にも届ける物資があったが断念した。待つてたかなあ。連絡をしたくても電話は通じない。山形市に戻ったのは午後10時過ぎ。翌朝はまた8時半の集合だ。公設の避難所以外に被災者が身を寄せ合っただけで、物資が行き届いていない場所はまだ多い。現地を下宿に回って孤立地域を見つげ出す、きめ細かな支援

「復興への一歩に」 山形のNPOなど被災者雇用

震災で失業した人を
寄付金を基にがれきり
泥の撤去作業員として
雇うことで雇用を創出
する「キャッシュ・フ
ォー・ワーク」(CFW
W)を宮城県石巻市で
始めた「東北広域震災
NGOセンター」の事
務局を務める山形市の
NPO法人「国際ボラ
ンティアセンター山
形」(IVY)。IV

Yの安達三千代事務局長(30)は「外部からだ
けてはなく地域の中で
人とお金が回ることに
重要。ささやかだが、
復興に向けたまちづく
りの一歩になってほし
い」と話している。

CFWは、被災者を
復興事業で雇用するこ
とで、被災者の自立支
援と地域の経済復興の
一石二鳥を狙うもの。
04年のスマトラ島沖大
地震でも行われた。

8日からハローワー
ク石巻に20人の求人
募集。12日から採用さ
れた5人が地元の建設
作業員に機材の使い方
などを教わりながら、
石巻市の1人暮らしの
高齢者宅で床下の泥の
撤去などを開始。その
後も採用を増やし、14
日までに男性計12人が
採用された。
12日から働き始めた

石巻市の高橋隆さん
(30)は勤め先だった市
内の水産加工会社が津
波で水没し、解雇を言
い渡されたという。「何
もしないでいるより、
体を動かして働きたい
と応募した。重労働だ
が、汗を流して働いて
いる方がよい。一日が
過ぎるのが早いし、達
成感もある」と話した。
8330)。
当面の求人は石巻市



宮城県石巻市で、1人暮らしの高齢者宅で床下の泥を
撤去する職を失った被災者(左)12日、IVY提供

2011年4月5日毎日新聞

2011年4月14日毎日新聞

「稼ぐことで希望」
NGO被災者雇用
東北地方を中心に民
間団体や自治体などで
作る「東北広域震災N

GOセンター」が、震
災で職を失った人を雇
って、独居高齢者の自
宅などでがれきり泥の
撤去作業にあたる「キ
ャッシュ・フォー・ワ
ーク」(CFW)を宮
城県石巻市で12日から
始めた。
CFWは、失業した
被災者の自立支援と被
災地復興の両立を目指
した事業で、山形市の
NPO法人「国際ボラ
ンティアセンター山
形」(IVY)など構
成団体が、寄せられた
寄付だけで生活するの

ではなく、働いてお金
を稼ぐことで希望が持
てる」と話す。問い合
わせはIVY(0233
・634・9830)。
【林奈緒美】